様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２５２４

研究課題名（和文）新出戦国竹簡に含まれる説話史料の歴史学的研究

研究課題名（英文）Stories Written on Newly Discovered Warring States' Period Bamboo-slips: A Historical Study

研究代表者
海老根　量介（EBINE, RYOSUKE）

学習院大学・文学部・准教授

研究者番号：３０７３６０２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では上博楚簡中に含まれる春秋時代の楚を中心とする各国に関する説話を取り上げ、歴史学的観点から検討した。これらの説話には登場人物の会話など史実と見なしがたい内容も含まれているが、説話の基本的なプロットは歴史的な事件に基づいて組み立てられており、史料批判を経て歴史学の研究に役立てることも可能であることを示した。また、これらの説話には『春秋左氏伝』と対応する内容も少なからず含まれている。従来の研究では両者の類似点ばかりが指摘されているが、本当に注目すべきは両者の相違点である。本研究ではその相違点を手がかりにして『春秋左氏伝』が先行する説話をどのように取り込み、成書されていったかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
上博楚簡は思想関連の文献が多くを占めることで知られており、主に思想史の分野での研究の進展が著しい。それに比べると上博楚簡の説話の研究は低調で、特に歴史学の研究対象とされることは少ない。本研究ではこうした従来あまり注目されてこなかった史料を取り上げ、春秋時代の歴史を研究する手がかりとした。これは、もともと依拠できる文献が限られている春秋時代研究の史料の欠を補うことにもつながる。また、その成書の経緯や史料的性格をめぐって異説の多い『春秋左氏伝』について、こうした説話を手がかりにして考察を進めることができることを示し、成書年代や地域について仮説を提示して従来の議論に一石を投じた。

研究成果の概要（英文）：This study discussed the stories of Chu and other states in the Spring and Autumn period written on the Chu Bamboo-Slip from Shanghai Museum using a historical method. Some of the content of these stories are hard to consider as historical facts, such as the speech of the characters. The plots are constructed based on the historical events. In this study, I have shown that it is possible to conduct historical research using these stories on the condition that we conduct appropriate evaluation of the historicity. Additionally, some stories seen in Zuo-zhuan closely resemble these newly discovered stories. In previous studies, the similarities between these stories and Zuo-zhuan have attracted considerable attention, but we should pay much more attention to the differences between them. By focusing on those differences, this study tried to describe the process of how the editor of Zuo-zhuan adopted many earlier stories and compiled them into Zuo-zhuan as it is today.

研究分野：中国古代史

キーワード：上博楚簡　楚　説話　出土史料

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、竹簡をはじめとする中国戦国時代の出土文字史料が続々と発見・公開されている。その中でも思想関連の文献が多くを占める上博楚簡は、郭店楚簡に次ぐ先秦思想史上の大発見として、主に中国思想史の分野からの注目を集めてきた。その反面、上博楚簡中に少なからず含まれる春秋時代の楚や晋・斉などに取材した説話については、思想関連の文献に比べると研究が低調で、しかも思想史的アプローチからの研究がほとんどである。しかしながら、これらの説話は春秋時代の歴史に関わる内容を多く含んでおり、また『春秋左氏伝』など伝世文献とも対応する内容を持つものがあることから、中国古代史の分野において史料として用いることができる可能性を秘めている。そこで、これまで十分に活用されているとは言い難いこれら上博楚簡中の春秋時代の説話にスポットライトを当て、歴史学的に研究することを着想するに至った。

２．研究の目的

本研究課題の研究目的は大きく分けて二つある。

一つ目は、春秋時代の歴史を研究するための史料の開拓である。これまで、春秋時代についての歴史学的な研究は、豊富な内容を持つ『春秋左氏伝』をはじめとするごく一部のまとまった伝世文献に頼らざるを得なかった。しかし、『春秋左氏伝』については多くの史料的問題がある。まずその成書をめぐっては、現在歴史学界では戦国時代中期説が主流であるが、かつて影響力のあった前漢末期劉歆偽作説や、前漢初期説などもなお存在する。またその内容についても、春秋時代の史官の実録であるとする説がある一方で、内容に累層性があり段階的に成立していったとする説もある。さらにその著作意図についても、特定の勢力の正統性を示す目的で記事を配列して編纂されたとする意見が唱えられている。いずれにせよ、『春秋左氏伝』の内容を全て無批判に事実と考え、それをもとに春秋時代の歴史を再構成することには慎重でなければならない。

そのため、『春秋左氏伝』をはじめとする伝世文献以外に、春秋時代の歴史を研究する手がかりとなる史料を開拓することは、当該時代研究において急務であると言える。上博楚簡に含まれる春秋時代の説話史料は、そのような手がかりを与えてくれる新史料となり得る可能性がある。そこで本研究課題では、こうした説話史料の内容を検討し、積極的に歴史学の研究に活用することで、その歴史学的意義を明らかにしたい。

二つ目は、『春秋左氏伝』の成書に関わる諸問題の再検討である。上述したように『春秋左氏伝』は複雑な来歴を持ち、それはこの史料を用いて春秋時代の研究を行う際のネックとなっている。こうした問題点を克服するためには、『春秋左氏伝』の成書年代や編纂意図をできる限り明らかにし、その中から春秋時代の研究に利用できる内容を峻別する必要がある。上博楚簡の春秋時代の説話史料には、『春秋左氏伝』とも対応関係を持つ内容のものが多い。そこでこれらの説話史料の内容を『春秋左氏伝』と比較することで、『春秋左氏伝』中に見える記述を検証することが可能になる。また、説話史料と『春秋左氏伝』との関係、両者それぞれの編纂意図の検討などを通じて、多くの説話史料が『春秋左氏伝』としてまとめられていった過程を考察する手がかりとすることもできるだろう。

３．研究の方法

本研究では上博楚簡など近年公開されている新出の戦国時代の竹簡史料を積極的に利用する。先述のように、春秋時代研究のために利用できる史料が少ないという状況にありながら、上博楚簡などに含まれる説話史料はこれまで十分に活かされてこなかった。そこで本研究では、これらの説話史料についてまず基礎的な研究を進め、史料として利用するための準備をする必要がある。具体的には、図版本が出版されて以降次々と発表されている先行研究を集め、それらを参照した上で、自分が正しいと判断した釈文を確定させ、内容の理解につとめる。各篇の釈文はデータベース化し、伝世文献などと容易に対照できるようにする。

その上で、作成した基礎的な釈文を踏まえて、実証的研究を行う。これらの説話史料の中には、『春秋左氏伝』などの伝世文献ときわめて明確な対応関係にある篇が散見される。そういった篇について、伝世文献の内容に引きずられることなく、各篇の文脈の中で矛盾のない読み方を心がける。そして、その内容を伝世文献と比較し、どこが一致し、どこが異なっているのかを詳細に分析し、なぜそのような違いが両者で生じているのかを考察する。その作業を通じて、多くの個別の説話を年代順に配置してまとめられた形式を持つ『春秋左氏伝』の編纂過程を解き明かしていきたい。また、直接伝世文献に対応する内容がない説話史料については、史料の空白を補うものとして利用できるよう基礎的な考察を進める。

４．研究成果

本研究では、上博楚簡に含まれるいわゆる「楚国故事」を中心に、新出楚簡中に見える説話史料について研究を進めた。まず上博楚簡『霊王遂申』については、筆者はかつて訳注を作成し、内容理解の鍵となる「王將遂邦」という語句を「楚の霊王が楚国を失おうとしている」と解釈した。しかし、その後に出た研究も含めて、大半の研究は「楚の霊王が申国もしくは蔡国を滅ぼそ

うとしている」と理解している。そこで『霊王遂申』の内容を再検討した結果、文構造から考えて「遂」は「失う」の意味、「邦」は楚国を指すこと、すなわち「王將遂邦」は楚の霊王が自分の国である楚国を失うことを意味すると改めて確認した。この成果は以前の筆者の説を補強するものであり、かつ「王將遂邦」を「霊王が申国ないし蔡国を滅ぼす」と理解する通説が成り立ち難いことを示したという点で重要である。

次に、上博楚簡『昭王毀室』・『君人者何必安哉』・『命』および包山楚簡の訴訟文書や伝世文献中にも見える「視日」について検討した。検討にあたって、まずはこれらの篇について先行研究を集めて釈読を行い、釈文を確定させた。その上で、「視日」がそれぞれの文中でどのような使われ方をしているかを分析し、それが大きく分けて①楚王の身辺で文書や言葉を伝達する官員、②文書もしくは口頭で楚王に上奏する際の決まり文句、③令尹・左尹ら高官者に対する尊称、という三種類の意味を持っていることを指摘した。さらに、この三種類の意味はそれぞれ無関係であるわけではなく、①が本来の意味であり、そこから②・③の用法が派生してきたことを、『春秋左氏伝』をはじめとする伝世文献中に見える「執事」などの語を参照しながら解明した。「視日」が一体何なのかをめぐっては、これまでも学界において盛んに議論が行われてきたが、いまだ意見の一致を見ておらず、また「視日」のすべての用例を統一的に解釈することもできていなかった。本研究では「視日」の意味を無理に一つに帰納することなく、一つの意味から派生した複数の意味を同時に持つと考えることで、従来釈然としなかった「視日」についてより正確に理解することができた。

さらに、筆者がかつて訳注を作成した『霊王遂申』・『平王与王子木』以外に、上博楚簡『荘王既成』・『申公臣霊王』・『鄭子家喪』についても釈文を確定させた上で、先行研究を踏まえながら、歴史学の史料としてどのように利用できるかを検討した。この中でも『鄭子家喪』や『申公臣霊王』は、対応する内容を持つ『春秋左氏伝』と関連づけながら研究が進められているが、これらと『春秋左氏伝』との間には異なる点もあり、その相違点にこそ着目すべきである。相違を見せているのは主に登場人物の会話などで、こうした内容をそのまま史実と認めて良いかは慎重であるべきだが、基本的なプロットは歴史的な事件に基づいて組み立てられていることが多く、史料批判を経て歴史学の研究に利用することも可能であることを指摘した。

『申公臣霊王』と『春秋左氏伝』の違いについてはさらに詳細な研究を行った。両者とも楚の霊王と部下の対話を収録し、記述の大半は対応関係にある。しかし、『申公臣霊王』は『春秋左氏伝』には見られない霊王と部下の和解場面がある、話題が手柄争いに終始している、などの違いがあり、これらは『申公臣霊王』が楚国の君臣間の美談を記す、『春秋左氏伝』が霊王を非難する、という編纂目的の違いに起因すると考えられる。また、部下が『申公臣霊王』では申公、『春秋左氏伝』では陳公となっているという重大な相違点も見受けられる。『申公臣霊王』が『春秋左氏伝』の取材源となったような説話であるとすれば、『春秋左氏伝』がこれを取り込む際に申公を陳公に誤ってしまった可能性が想定できる。楚簡中では地名の「申」と「陳」が明確に使い分けられていることを踏まえると、こうした誤りは楚簡中の用字習慣を知らない地域もしくは時代における『春秋左氏伝』の成書を窺わせるものであると考えられる。

先行研究においては、『申公臣霊王』と『春秋左氏伝』の対応関係が大きく注目され、『申公臣霊王』の記述も『春秋左氏伝』に引きずられて理解される傾向が強い。本研究ではそのような研究姿勢に疑問を投げかけ、従来等閑視されてきた両者の相違点を手がかりに、『春秋左氏伝』の成書問題にまで切り込むことができた。もちろん、『申公臣霊王』に対応する『春秋左氏伝』の記述は全体の中のごくわずかにすぎず、これをもって『春秋左氏伝』の成書の経緯を完全に解き明かすことは難しい。だが、今後も『春秋左氏伝』を、それと対応する内容を持つ出土文字史料と比較する作業を積み重ねていくことで、その成書に関わる事情をより明らかにできると考えている。爾後の課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 海老根量介	４．巻 9
２．論文標題 岳麓書院蔵秦簡《置吏律》札記	５．発行年 2020年
３．雑誌名 出土文献与法律史研究	６．最初と最後の頁 139-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 海老根量介	４．巻 －
２．論文標題 霊王所“遂”者究竟為何国？――《霊王遂申》再考	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文字・文献・文明	６．最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 海老根量介	４．巻 61
２．論文標題 出土文字史料から歴史を読む――楚簡の世界――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 学習院史学	６．最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 海老根量介	４．巻 183
２．論文標題 上博楚簡『申公臣霊王』と『左伝』の成立について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東洋文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　6件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 海老根量介
2．発表標題 再論“視日”――以伝世文献与秦漢行政文書為線索
3．学会等名 第九届出土文献青年学者国際論壇（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 海老根量介
2．発表標題 日本学界《日書》研究的回顧与今後的課題
3．学会等名 中央研究院歴史語言研究所専題演講（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 海老根量介
2．発表標題 岳麓書院蔵秦簡《置吏律》札記
3．学会等名 第九届“出土文献与法律史研究”学術研討会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 海老根量介
2．発表標題 簡帛時代的“書籍”流伝小考――以《日書》為中心
3．学会等名 《文史哲》青年学者工作坊暨第十二届中国中古史青年学者聯誼会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 海老根量介
２．発表標題 霊王所“遂”者究竟為何国？――《霊王遂申》再考
３．学会等名 文字・文献与文明――第七届出土文献青年学者論壇暨国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 海老根量介
２．発表標題 出土文字史料から歴史を読む―楚簡の世界―
３．学会等名 第38回学習院大学史学会大会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関